

ITを活用し、市民と協働する地域子ども家庭支援

—事例報告 東京・三鷹市の取り組み—

熊井利廣 (杏林大学 保健学部准教授)

はじめに

東京都のほぼ中央に位置しているのが三鷹市である。人口は約17万人。三鷹市の特徴は、行政として早くに保育施策中心から、すべての子どもと家庭を対象にした地域子ども家庭支援へと児童福祉領域を拡充したことだろう。10年ほど前、子ども家庭支援センターを設置し、併せて児童相談所など関係機関と連携するための仕組みとして子ども家庭支援ネットワークを構築した⁽¹⁾。また、市民による子育て支援活動も活発で、一例として、子育て当事者(親)が市のホームページ制作に参加していることなどもあげられる。本稿では、地域の子ども家庭支援における、ITを活用した行政と市民の協働のモデルとして三鷹市の取り組みを紹介したい。

市のホームページに子育て専門のサイト

三鷹市のホームページには、子育てに関するポータルサイトである『みたか子育てねっと』が設けられている。『子育てねっと』の構造は、①行政情報提供 ②地域・民間情報提供 ③ファミリーサポートセンター運営 ④掲示板 の4種類のサイトから構成されている。このうち、2の地域・民間情報提供のサイトは『子育てコンビニ』と名づけられている。

『みたか子育てねっと』は、三鷹市が市の第3セクターである(株)まちづくり三鷹と共同で企画開発し、2001年に開設した。運営は三鷹市が(株)まちづくり三鷹に委託している。(株)まちづくり三鷹では『子育てねっと』の中の『子育てコンビニ』の企画、編集、取材など一連の制作業務をNPO法人子育てコンビニに委託している。このNPO法人は、市が行ったボランティア募集に応じた親たちが、その後、市側の支援を受けながら創設したものである。

母親たちが企画から取材まで

『子育てコンビニ』の詳しい内容については、実際

にアクセスしていただければ幸いである⁽²⁾。三鷹市役所のホームページの右下にある『子育てねっと』をクリックして入ることができる。以下に、主なページとその説明、及び最新号(2007年9月)の内容を中心に抜粋した。

- ① 特集「映画を見よう! 子どもと一緒に♪ 子どもがいるから♪」
- ② おでかけ(トイレ情報、子連れに優しいお店情報など) おでかけレポート。子連れ料理教室に行ってきました。～市内の子連れOKの親子料理教室の体験レポート～
- ③ コラム(子育てにまつわる楽しいエッセイ満載!) 赤ちゃんを連れて旅に出よう! ～旅行添乗員ママによる子連れ旅行記～
- ④ 子育て支援(託児施設の取材レポート、保育園の地域開放事業の参加レポートや、幼稚園・保育園などの施設情報。そのほか、三鷹の子育て自主グループの紹介) ベビーフレンドリー化事業、改修された図書館に行ってきました。～赤ちゃんと一緒に過ごせるように施設改修した市立図書館の体験レポート～



ホームページ「みたか子育てねっと」のトップページ

- ⑤ そうだん（相談できる場所の紹介と、実際に相談に行った方の体験談の紹介。先輩ママのアドバイス）
- 児童相談所、子ども家庭支援センターなど専門機関の取材レポート
- ⑥ てづくり（手作りおもちゃ、おすすめ離乳食など、ママやパパたちの手作りの秘密教えます！）
我が家の手作りおもちゃ。～読者から寄せられた作品の紹介～
- ⑦ けんこう（助産師さんへの相談コーナー、歯科医・眼科医の先生のコラムなどの健康情報がいっぱい）
助産師さんに質問「生後1か月半の湿疹と皮脂バランスについて」
ふくだ先生の歯っぴーコラム「子どもの治療を成功させるために」
- ⑧ あそまな（遊ぶこと、学ぶこと。どちらも子どもと一緒に楽しみましょう♪）
「おもちゃであそぼ（北野ハピネスセンターのおもちゃ紹介）」
「ふれあい体操（わらべうたの体操）」
- ⑨ 子育て支援カレンダー（保育所、児童館、子ども家庭支援センターなど子育て支援事業・施設の行事予定などの紹介）

このように子育てに直接役立つ情報の提供から専門機関の紹介まで、その内容は幅広い。子育て情報というより子育てを楽しむことに役立つ情報ともいえる。三鷹市が主管する子育て支援事業や専門機関に関しても、単なる紹介ではなく、母親自身の取材レポートや体験談が中心である。①から⑨まで相当のボリュームだが、企画・取材・編集など、必要な業務はすべてNPO 法人子育てコンビニの母親たちが担っている。

子ども家庭支援ネットワークも紹介

「そくだん」のページでは、第1回目に子ども家庭支援センターを掲載したのをはじめ、保健センターや教育センター、児童相談所など、子どもと家庭に関わる専門機関を母親たちが取材し、レポートしている。第10回目では、児童相談所や子ども家庭支援センターなど専門機関の連携の仕組みである「三鷹市子ども家庭支援ネットワーク」を次のように紹介している³⁾。

「子育ての悩み相談しましょう」のコーナーで、これまで三鷹市内の主な相談先を紹介してきました。実は、これらの相談先は全部一つのネットワークとして連携しているのです。…中略…例えば虐待の問題が起きたとき、虐待をしている親についての対応で良いのかということ、そうではなく、その家庭の夫婦の問題、

虐待を受けている子どもの心のケア、場合によっては保護なども発生してきます。兄弟姉妹がいれば、その子どもたちのこともかかわってくるのです。…中略…とにかく家庭内に問題が起きたとき、市内にあるいろいろな相談機関のどこかにまずは相談してみましよう。そのうしろには心強い子ども家庭支援ネットワークがありますので、どんな深刻な問題でも、必ず希望を持てる良い解決方法が見つかるはず。自分達だけで解決しようとしなくて、あきらめないでまずは身近なところに相談してみましよう」（下線部筆者）

子どもと家庭に関する専門機関同士が連携することについて、ここでは親の目線でその意義が語られ、「とにかく、どこかにまず相談してみる」ことの大切さを伝えている。

制作はワークショップと編集会議を経て

『子育てコンビニ』のページは、基本的に毎月更新される。その内容は月に1回開催される「みんなでつくろう！ 子育てコンビニ」と名づけられたワークショップと、その後に開催される編集会議を経て、制作されていく。

(1) 「みんなでつくろう！ 子育てコンビニ」

このワークショップの開催は、ホームページ上で場所・日時が案内される。ページの冒頭には、「毎回様々なテーマで、みなさんとおしゃべりする会です。初めての方も、お子さん連れでどうぞ気軽にいらしてくださいね」と書かれている。実際、子ども連れで集まって気軽におしゃべりできるサロンのようなスタイルで運営されている。参加者数は、親子連れ2～3組から、多いときは14～15組である。

ここでの話題の多くが、翌月以降の『子育てコンビニ』のネタとなる。言い換えればホームページ作りのための情報収集の場である。例えば2006年11月には“子どもの肌の乾燥対策”が話題になったが、編集会議で議論され、2007年1月号で『気になる冬のカサカサお肌、うちの対策』という特集になった。2007年9月の「みんなで…」は「プレママ座談会」と銘打たれ、初めての妊娠の方同士、また“ベテランママ”との交流が行われた。

(2) 編集会議

編集会議は、NPO 法人子育てコンビニのメンバーに(株)まちづくり三鷹の担当者や児童福祉を専門とする大学教員が編集委員として加わり、月に1回開催さ

れる。まず、「みんなでつくろう！ 子育てコンビニ」の様子や話題などが報告され、次号以降の企画が話し合われる。その他、取材や原稿の進行状況の確認など、編集全般に関することが行われる。

市の児童福祉主管課との打ち合わせや他の行政機関等との連携が必要な場合は、主に(株)まちづくり三鷹の担当者が調整を行う。

NPO法人子育てコンビニ設立の経緯

そもそもは、市民との協働のひとつの方法として、市側が市民に呼び掛けたのが出発点だった。

1. 市がホームページ作成ボランティアを募集

2001年、市と(株)まちづくり三鷹は、市の広報紙やチラシ等で『子育てコンビニ』制作への参加を広く市民に呼びかけた。

子育て中の専業主婦を中心に、年齢、性別、既婚未婚を問わず市民約50人がボランティアとして参加した。(株)まちづくり三鷹が開催する「取材のしかた講習会」(パソコンに慣れることやデジタルカメラやワープロソフトの使い方、レポートの書き方など)や「Webづくり講習会」(Web作成ソフトの使い方など)を受講。また、ワークショップで自分たちが地域でほしい情報や知らせたい情報などを話し合い、子連れで、あるいはお互いに子どもを預けあいながら取材をした。

こうした経過を経て、地域・民間の子育て情報を中心とする『子育てコンビニ』のページが三鷹市役所の『子育てねっと』内の正式なページとしてアップされた。

2. 特定非営利活動法人へ

2002年、ボランティア活動が始まって1年後に、「パソコンスキルを活かしたい」「社会参加を進めたい」と感じた20人の母親たちが、子育て支援グループ「子育てコンビニ」として独立した。さらに2002年9月、NPO法人子育てコンビニを設立。(株)まちづくり三鷹では、サイト『子育てコンビニ』の製作と運営を委託した。この間、市側は継続して支援を行ってきた。

NPO法人子育てコンビニが果たす役割

今回、ホームページ『子育てねっと』の様子とNPO法人子育てコンビニの活動を報告した。これらの果たしている役割は何だろう。

(1) 多くの市民に多くの情報を提供

『子育てねっと』開設当初の1日あたりの平均アクセス数は、約120件だった。現在では1日平均約1400件となった。1ヵ月に約4万3000件のアクセスがある。そして、『子育てねっと』のなかで『子育てコンビニ』は多くの利用者に最初にアクセスされる傾向がある。『子育てコンビニ』のページを見て、ついでに行政のページを見に行く姿がうかがわれる。行政のページと市民のページが同居していることが、この効果を生んでいると思われる。

多くの市民に、子育てに関して行政からの情報も含めて幅広い情報を、数多く提供していると言えるだろう。

(2) 情報をより身近なものに

子ども家庭支援センター、児童相談所などの専門機関も、母親自身による取材レポートによって紹介されている。市民にとっては身近な存在に感じられるだろう。

三鷹市には障害を持つ子どもの療育施設として北野ハピネスセンターがある。2007年8月、このセンターに関わるやりとりが『子育てねっと』内の「掲示板」に書き込まれた。子どもの言葉の遅れを心配する母親の投稿が掲載されたのだが、その日のうちに、別の母親が北野ハピネスセンターを紹介するコメントを書き込んでいた。自分の子どもにも言葉の遅れがありセンターへ定期的に通っているとのことで、「もんもんとしているより、相談して、療育を受けられてよかった。療育と言ってもプレ幼稚園みたいな、私にとってもほっとする場ですよ」と自分の経験を書いていた。実は最初の投稿者は、センターの存在は知っていたものの相談する決心がつかなかったようで、「迷っていたのですが電話してみようと思います。ありがとうございます」と返信していた。

専門機関の存在を知っていても、だからといって相談できるものではないだろう。

『子育てコンビニ』には、北野ハピネスセンターの取材レポートも掲載されている。ここで使用されている職員手製のおもちゃは、「あそび」のページでも紹介されている。いくつにも重なるように多くの情報があって、専門機関を身近に感じられる。さらに「掲示板」で、自分の相談にのってくれる人に出会う。それらが一つのホームページ上で行われることのメリットは大きい。

そして、重要なのは、多くの市民が、このような掲示板のやりとり、取材レポート、手作りおもちゃの記事などを見て、子どもの言葉の遅れが心配なときには市内にはこうした機関があると、リアルに知ることができることではないだろうか。

(3) フェイス・トゥ・フェイスの関係づくりを大事に

NPO法人子育てコンビニのメンバーは、「みんなでつくろう！子育てコンビニ」にどのような意義を見出しているのだろうか。編集委員として中心的な役割を担っているメンバー（複数）は次のように語っている。

「実際に顔を合わせて話すことの重要性は、インターネットを使えば使うほどますます強く感じます」

「孤独な子育てをしている母親たちが、社会に一步出るチャンスとなり、孤独で辛い子育てから、地域で楽しい子育てをするための入り口」

このようにITをツールとして使いながらも、地域で実際に人と人がフェイス・トゥ・フェイスで会う取り組みを大切にしている。「情報収集」の場だけではない大きな意義を、メンバー自身が明確に認識し、意図的に企画しているのである。

最後に

ITの活用そして市民の活動が、地域の子ども家庭支援に大きな相乗効果をもたらしていると思われる。しかし、それだけではない。NPO法人子育てコンビニの業務は、現在では『お出かけマップ』の制作（三鷹市からの受託）、保育園、子育て支援グループなどを対象にしたブログ講習会の開催など大きく広がっているが、NPO法人子育てコンビニ代表理事の高瀬は次のように述べている⁽⁴⁾。

「子育て中でも社会参加するためにはどうすればよいか」という思いが高まり、2002年に法人格を取得、本格的な活動を始めました。…（中略）…子育てのために何かをあきらめるのではなく、子育ても仕事も社会参加も欲張れるような、専業主婦でもなくワーキングマザーというくくりでもない新しい子育てライフスタイルを創り出すことをミッションと考えています。……中略…私たちがITを使って実現したいことは、ITをツールとしてうまく利用し、的確な情報を迅速に伝えることで子育ての不安感・不透明感を払拭するだけでなく、地域参加・地域貢献の新しいやり方を創出し、子育て中だからこそ得られること、子育て中で

なければなしえないことを距離的・心理的障壁なしで達成することです」(下線部筆者)

この文からは、ホームページ制作ボランティアとして出発したが、その後子育てに関連するコミュニティビジネスに発展し、子育てをしている自分だからできる仕事として取り組んでいる姿が読み取れる。

子育て中の市民から見れば、ホームページ『子育てねっと』を通して地域の子育て情報を得るだけでなく、NPO法人子育てコンビニメンバーの多彩な活動ぶり、子育て中の親たちの様々な考え方に触れることによって、子育てしながらも社会に関わることができることや子育てすることの楽しさを知ることができるだろう。

現在、母親にとっての子育ては、自分を制約するものとしてとらえられやすい。子育てと“自己実現”が相反するものと感じられ、子育ての不安・負担感につながりやすい状況のなかに置かれている。働く女性への支援は当然のこととして充実させる必要があるが、一方、専業主婦かフルタイム就労かの二者択一ではなく、社会への関わりを持ちながら同時に子育ての喜びを感じられるような暮らし方を選べる幅広い選択肢、及びそのための支援が必要と考えられる。NPO法人子育てコンビニは、その必要性、可能性を示唆している。

社会をどうデザインするか、地方自治体にとっても問われているのである。

筆者は、かつて三鷹市職員として子ども家庭支援センターの設置やネットワークの構築に携わった。今、NPO法人子育てコンビニのお手伝いもしている。そのような関わりから今回、三鷹市の取り組みの一端をご紹介させていただいた。なお、本稿作成にあたっては、NPO法人子育てコンビニのメンバーをはじめ、(株)まちづくり三鷹、三鷹市健康福祉部子育て支援室にご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。

《注》

(1) 三鷹市の子ども家庭支援センターの取り組みや地域ネットワークの活動については、松田博雄ほか編著：『三鷹市の子ども家庭支援ネットワーク 地域における子育て支援の取り組み』ミネルヴァ書房（2003）に詳しい。

(2) <http://www.city.mitaka.tokyo.jp/>

(3) <http://www.kosodate.mitaka.ne.jp/toptop>.

(4) 高瀬香織：インターネットを利用した次世代育成支援IT＝新しい子育てスタイルを創出するツール～ヴァーチャルとリアル境界を越える21世紀の子育てスタイル、日本子ども家庭総合研究所 (http://www.aiiku.or.jp/aiiku/jigyo/contents/shien/sh0511/sh0511_2.htm)